

ハイデルベルク信仰問答より

問 74 幼児もまた、洗礼を受けられるべきですか。

答え 授けられるべきであります。それは両親と同じく、彼らが契約の中に入れられて神の民に属している(創世 17:7、マタイ 19:14)からであります。キリストの血による罪からの救いと聖霊による信仰の賜物とが、共にその両親に劣らず子供たちにも約束されています(使徒 2:38-39)ので、幼児もまた洗礼によって契約のしるしとして、キリストの教会の一員とされ、未信者の子供たちから区別されるべきであります(使徒 10:47、I コリント 7:14)。このことは旧約聖書においては、割礼によって行なわれています(創世 17:1-14)。新約聖書では、洗礼はこれに代わって定められたものがあります(コロサイ 2:11-13)。

問 69 から「洗礼」について学んできましたが、今日でその最終回となります。問 74 では「幼児洗礼」の問題が取り扱われており、これは現代においても見解の違いが存在します。これまで本問答書で学んできたところによると、洗礼とは聖霊によって主イエスを信じた人の罪が全く取り除かれたことを公に表す儀式でありますから、まだ意識的に信仰を言い表すことのできない幼児に洗礼を施すことは妥当であるかという問題が生じるわけです。その判断は、各教派の考え方によって異なることとなります。まずは、幼児洗礼を認めている教派と認めていない教派を整理しておきましょう。

【認めている教派】

西方教会

- ・ カトリック教会
- ・ 聖公会
- ・ ルーテル教会
- ・ 改革派
- ・ 長老教会
- ・ メソジスト

東方教会

- ・ 正教会
- ・ 東方諸教会

【認めていない教派】

プロテスタント諸派

- ・ バプテスト教会
- ・ ペンテコステ派
- ・ アーミッシュ
- ・ プリマス・ブレザレン
- ・ セブンスデー・アドベンチスト
- ・ アルミニウス派

以上のように見てみますと、プロテスタントの中に幼児洗礼を認めている教派と認めていない教派が存在することが分かります。ただ、同じく認めているカトリック教会と改革派(リフォームド)でも考え方の違いがあり、儀式そのものに効力があると考えるカトリック教会に対

し、改革派は「神との契約の下に生まれた子」としての意味を重視するところから幼児洗礼を是としています。本問答書はリフォームドの立場で書かれているため、「授けられるべきであります」という答えになっているのです。また、「それは両親と同じく、彼らが契約の中に入れられて神の民に属しているからであります」という理由が添えられ、契約共同体の中で生まれた子どもたちはその契約から排除されるべきではないという「家族単位の信仰共同体」の意識が強く表されています。この意識は「このことは旧約聖書においては、割礼によって行なわれています」「新約聖書では、洗礼はこれに代わって定められた」と説明されているように、旧約イスラエルにおいて生まれて八日目の男児に割礼を受けたこととの関係性が指摘されています。また、「キリストの血による罪からの救いと聖霊による信仰の賜物とが、共にその両親に劣らず子供たちにも約束されています」とも言われているように、子どもたちにはまだ自覚がなかったとしても、彼らに対する神の約束は確かであり、時至ってその実が結ばれるという「親の信仰表明」とも理解することができます。

因みに、以前にも書かせていただきましたように、奥村はリフォームド神学の立場を採っていた親から幼児洗礼を授けられ、中学生時代に信仰告白をしました。それまでは聖餐式にあずかることができず、排除されているかのようなもどかしさを感じていたものです。また、もう一つ残念だったのは、(愚痴ではありませんが)教会の誰からも信仰告白を勧められたことがなく、そのための学びの機会も設けてもらえなかったことです。子どもの頃、親を捕まえて、「自分はいつから聖餐式にあずかれるようになるのか」「幼児洗礼とはどういう目的で行なわれるのか」「幼児洗礼を受ける機会なく亡くなった子どもは天国へ行けないのか」など、質問を浴びせかけていたのを覚えています。今思い起こすと、これらの問いに対する親の回答は基本的にリフォームド神学に立っていたことが分かります。

これに対し、バプテスト教会では原則として、イエス・キリストにある罪の赦しの意味を知的に理解した成人が受洗すべきであるという立場に立っています。知的に成熟していない段階では、子どもは福音を理解することができず、自分が告白した信仰に責任を持つことができないと考えます。このような理由により、幼児洗礼には否定的で、同じ流れの中にあつたアナバプテスト派(宗教改革後)では、幼児洗礼を既に受けた人であっても改めて受洗することが求められました。しかし、このことが当時大きな問題を引き起こし、「イエス・キリストの恵みの無効化ではないか」という論議も巻き起こりました。そして、彼らは「再洗礼派」と呼ばれ、皮肉を込めて溺死による処刑まで行なわれたといえます。現代では、メノナイト、アーミッシュ、ブレザレンなどがその流れを汲んでいます。

さて、以上のようにリフォームドとバプテスト系の考え方を比較してみましたが、それぞれに不完全さがあることが分かるでしょう。リフォームドにおいては、幼児洗礼を受けたからといって誰もが信仰告白に至るわけではないという課題があります。契約の子として生まれても、その契約に留められないケースがあるのです。バプテスト派においては、自分が告白した信

仰に責任を持てるようになるのは何歳からであるかという課題があります。自分の意志で信仰を言い表すことを待ち続けた結果、その日がいつまで経っても来ないということもあり得るでしょう。

いずれにせよ、人の救いは人間の力では決してもたらすことができません。その前提に立った上で、私はこれまでの牧会人生において努めてきたことがあります。自分が成人洗礼にあずかれなかったという残念もどこかに影響しているかもしれませんが、幼児洗礼は一度も授けたことがなく、その代わりに（ご両親の希望があれば）献児式を行なってきました。その献児式の中に「契約の子」という意味を込めているのです。そして、子どもが罪を認識できるようになると言われる9歳頃を目標に祈り続け、子どもたちが自分の口で受洗の意志を表してくれる日を待ち望みます。そこから知的な成長を見つつ、1～2年かけて洗礼準備クラスを進めていきます。信仰告白の文章は、若干の導きはするものの、基本的に自分のことばで書いてもらいます。洗礼式のスタイルは原則として浸礼が望ましいと思っていますが、健康状態や状況によって滴礼で挙式することにもこだわらないようにしています。洗礼式をスタート地点と考えていますので、可能な限り学びを継続し、用いるテキストのレベルも少しずつ上げていきます。教会の良き奉仕者、社会における証人に成長し、神学校にまで送り込むことができれば本望です。最近、娘のような稀なケースもあったことにより、障害を持つ子どもの救いについて考える機会が与えられました。重要なことは、個々の子どもを愛し、その子の性質を見極め、型に捉われることなくアプローチの仕方を考えていくことだと思っています。

以上で洗礼に関する学びは終了いたします。